

Charles Drazin (ed.)  
*John Fowles : The Journals*  
2 vols. (Jonathan Cape, 2003-2006)

有 為 楠 泉

ジョン・ファウルズ (John Fowles, 1926-2005) は、その作品ごとに話題を呼ぶ新しいテーマ、卓越した想像力、斬新な実験的手法のゆえに、永らく現代イギリス作家の重鎮と目されてきた。20世紀後半の、ポストモダニズム小説、あるいはメタフィクションの担い手として知られるファウルズは、トルストイやヘンリー・ジェイムズに比肩する小説家という評価と名声を享受してきたと言っても過言でない。本書は、ファウルズが、「書くこと」に対して積極的な言及を見せるようになった二十代前半、オックスフォードの学生であった1949年9月11日の日記から始まり、六十代半ば、すでに作家として名実ともにゆるぎない地位を確立していた1990年3月5日までに書かれた日記を、2巻本、合わせて1,100余ページに亘って収録したものである。編集者ドレイジンの解説によれば、ファウルズの日記は、他にこの期間の前や途中で書かれて収録されなかったものも多々存在し、また無論1990年以降も彼は日記をコンスタントに書き続けたので、実際には正に膨大な量の日記が存在していることになる。

全ての日記を網羅するものではないとは言え、世のジョン・ファウルズ・ファンやファウルズ研究者にとって本書が待望の書であることは間違いない。また、存命中の作家の日記の出版という事柄は、著者である作家自身が日記というものに対して抱く考えを、読者に想起させると考えられる。遺憾ながら、ファウルズは、本書第2巻の出版を2ヶ月足らず後に控えて、2005年11月に亡くなった。しかし、日記の出版に際してファウルズは、しばしば、編者ドレイジンに対し、その記述を執筆当時のまま一切修正を加えることなく掲載するように伝えたと言う。それは作家としてのファウルズの見識を示すと同時に、自分の日記を“disjoints”（「ばらばらのもの」）の集合と捉えて、

さまざまな事柄に対する断片的思惟をさまざまな形のまま盛り込んだ一つの文学スタイルとして提示しようとしたファウルズの考えを示すものであると推察することも可能である。

その内容を検討する前に、ファウルズの活動について、簡単に辿ってみる。彼は、イギリスのエセックス州、ロンドン郊外の土地で、ビジネスマンの家庭に生まれた。エディンバラ大学を出て、海兵隊に入隊したものの、その後また、オックスフォード大学に入り、フランス文学を学んでいる。フランスと、次にギリシャで英語教師の職に就き、その後イギリスに戻って小説家を目指す。そして、1963年に出版された *The Collector* (『コレクター』) によって、彼の名前は小説家として一気に世に知られるところとなった。この作品は、愛する女性を幽閉し、あげくにその女性を死に至らしめる若者の衝動と自我を描いて大きな反響を呼び、14か国語以上に翻訳されている。人間の理不尽な行為をテーマにした小説の走りだった。その後、一作ごとに新しいテーマと手法を、並外れた想像力によって展開し、フィクション自体をフィクションに仕立て上げるメタフィクションの旗手となる。例えば、*The French Lieutenant's Woman* (『フランス人副船長の女』、1969) では、小説にストーリーの全く異なる二つの結末を提供し、読む側に選択させるという方法で読者を驚かせた。あるいは、*A Maggot* (『幼虫』、1985) においては、18世紀半ばのできごとを素材にし、全編、文体は擬古文からなる「時代小説」に仕立てあげ、その随所に、イギリス初の雑誌である *The Gentleman's Magazine* の誌面を現物の形のまま挿入するという実験的要素を加えた。そして、そこに展開されるのは、現実(ファクト)と架空(イリュージョン)、過去と現在と未来が混在した不思議なストーリーである。一方、ギリシャでの体験を反映した小説 *The Magus* (『魔術師』、1965) や自伝的色合いの濃い小説 *Daniel Martin* (『ダニエル・マーティン』、1977)、また、「善」についての哲学書ともいえるべき *The Aristos* (『アリストス』、1964) など、作品の系統は多岐にわたり、類型化を拒否する活動展開のように思われる。

しかし、また一方で、ファウルズの活動の根幹には、自然への深い憧憬と愛護精神が常に潜んでいることを見落としてはならない。エッセイ *The Tree* (『樹木』、1979) には、ロンドンのシティに通勤し、菜園での果樹栽培を趣味とした父親に、樹木や自然に親しむことを習いはしたものの、「栽培」「剪定」という作為に父との違和感をつのらせたことが、原体験として

述べられている。第二次大戦中、大学生だった彼は、デヴォン州の両親の疎開先で体験した自然に深く感動し、以後終生変わらぬ自然観を確立することとなる。彼は原始のままの自然に憧憬を抱き続け、実際そのためのさまざまな活動と努力を惜しまなかった。生物多様性への関心を深め、ネイチャー・ライティングの実績を積み重ねていくのである。"Swan Song of the European Wild"（「欧州野生終焉の歌」、1965）、"Weeds, Bugs, Americans"（「雑草・虫・アメリカ人」、1970）、"The Blinded Eye"（「目隠しされた目」1971）等のエッセイにおいて、均衡の欠けたエコロジーに警鐘を鳴らし、殺虫剤の使用が自然に及ぼす害を批判し、種の減少を嘆いて、残る自然との付き合い方を訴えた。それらは1970年代に世界的な広がりを見せた環境保護運動の先鞭をつけるものであったという点において注目に値する。先述の『樹木』は、彼の自然観を小説論にまで昇華したネイチャー・ライティングの結晶とも言うべき作品である。その後、1987年には環境団体「グリーンピース」の機関紙に寄稿し、90年代に入ると新聞やBBC放送を通じての提言など、さらに活動の幅は広がった。また、ドーセット州ライムリージスに移住し、海岸から続く崖（アンダークリフ）に沿って約8000㎡の土地を購入し、自然の姿を維持することに努めた。その土地のあまりの野生ぶりに、訪れた彼の父親は怯えたといわれる。ジュラ紀、白亜紀の地層と化石で有名なこの土地で、ファウルズは自然博物館の「終身館長」でもあった。

では、このように多彩な小説家であり自然愛護の活動家でもあったファウルズの日記はどんな内容であっただろうか。予想どおり、本書1,100余ページを埋めるのは、彼の遭遇した多種多様な人物や事柄についての膨大な数と量のコメントである。夥しい数の作家論・作品論であり、哲学的断片やエッセイである。また、自然界のあらゆる相にまなざしを向け、その美を感知する詩人の語りである。とりわけ、庭の小鳥、樹木、空、雲、夕日など、ごく日常的に見かけられる自然の事物や風景への深い感応を表した文章は驚くほど美しい。国内外のできごとやニュース、歴史的イベント、新しい小説の誕生をほめかすインスピレーションの湧き出る瞬間、複数の小説の映画化に伴って生じたハリウッドの映画界との接触と違和感、その他さまざまな人や事柄についての記録は、正に「ディスジョイントの集合」というファウルズの表現どおりのもと言えるだろう。

しかし、もちろん、日記には、その著者の人生の軌跡が表れる。本書にお

いても、一人の作家の人生の歓喜と苦悶が、強烈なバネとなって読者をひきつけ、強く共振を促す。第一巻では、オックスフォードでの二度目の学生時代から、フランス、ギリシャでの英語教師時代を経て、イギリスに戻り、ロンドンでの新婚生活のあと、小説家デビューを果たして終生の土地ライムリーズに移るまでの（年齢では23歳から39歳までの）16年間の出来事が登場するし、第2巻では、その後、作家活動と自然を守る暮らしをライムリーズで続けた（65歳になる直前までの）25年間の軌跡が（途中3年間のブランクはあるものの）辿られる。そして、日記の大半で最も大きな比重を占めるのは、妻エリザベスとの関係である。ギリシャでの英語教師時代の同僚ロイ・クリスティの妻であったエリザベス。彼女との恋愛と結婚は、二人の間で徐々に進行する不協和音と果てしない言い争い、そして彼女の突然とも言える病死という成り行きに象徴的に表れるように、至上の喜びと同時に、常に絶えることのない激しい緊張と不安、悲しみをファウルズの人生にもたらした。ファウルズは、自分と同じく作家志望で、自分より数倍も自信を持ち、自己中心的なロイから妻を奪ったことに対して、決して誉められたことではないとしながらも後ろめたさを感じない。しかし、結婚生活を続ける中で、自然の世界にほとんど全く興味を示さないエリザベスとの間に徐々に生じた違和感は、さまざまな事柄に関する二人のくい違いとなって尾を引くようになる。その様子は、日記の中で、ファウルズの苦痛と戸惑いを溢れさせながら鮮明に跡付けられる。互いに自分に正直であったがゆえに、口論以外に相手に対して言葉を失っていったことは、言葉を道具とする作家にとって皮肉で悲劇的な成り行きであったろう。そして、癌が判明してからわずか10日で急逝したエリザベスに対してファウルズの寄せる哀惜の念は、取り返しのつかない不調和の時間が存在した分なお一層悲痛である。本編は、エリザベスの死後数日間のファウルズの、放心状態に近い日々の記録で終わっている。

つまり、本書に収録された日記には「ものがたり」が存在している。日記の収録がエリザベスの死を区切りに終わっていることは、本書の「ものがたり性」を高める結果となっている。エリザベスの死がファウルズの人生の一区切りであったことは確かであるし、ファウルズが非常に深い心の痛手を負ったことも知られている。しかし、それを知らずしても、本書がひとつの愛と喪失の「ものがたり」を提供していることは明白に読み取れるだろう。実際、これまでも、「喪失」や「失跡」といったことがらは、ファウルズの小説

に繰り返し登場した主要テーマの一つである。先述のごとく、ファウルズは日記をディスジョイント（「ばらばらなもの」）の集合と捉えており、実際、本書がそうであることは間違いない。しかしながら、そういうディスジョイントの大集合体というスタイル、及び、ディスジョイントがそれぞれに保持する固有の内容と時間性といったものと共存する形で、本書は、その「ものがたり性」でもって、読者をあたかも一つの完璧な「一人称小説」の世界に誘導する要素と力を十分備えているのである。それは正に、さまざまな工夫と想像力をめぐるして新しい小説、あるいはメタフィクションを生み出していったファウルズの新たな実験を髣髴させるようにも思われる。彼の最後の実験としてこの日記を読むことは、たとえその実験が編者の手を借りたものであったにしろ、十分可能であるし、ファウルズに対する敬意を些かも損なうことにはならないだろう。

ファウルズは『幼虫』を1985年に上梓して以来、小説を発表しなかった。しかし、エッセイやレポート、BBC放送のドキュメント、インタビュー等、年齢を感じさせないその後の多彩な活動の中で、何度か新しい小説について言及している。日記である本書の出版を通して、読者はある意味でファウルズの新しい小説に出会ったと感ずることができるのではないだろうか。小説家の日記であると同時に、日記が作り上げた小説家の新しい小説ということである。